

六甲山のキノコの多様性に関する研究

林孝太郎・村下友風・門田智子・中村孝憲・岩谷佳奈・神谷遥果・洞庭風人・
藤崎恵吾・前田詩帆（兵庫県立御影高等学校 環境科学部生物班）

はじめに

本校では平成20年度から兵庫県立人と自然の博物館・兵庫きのこ研究会と協力しながら六甲山のキノコの調査を行っている。六甲山の再度公園のキノコの多様性を標本作成や生態分析から明らかにし、生物多様性を多くの人に伝えることが活動の目的である。今回はナラ枯れ被害量と硬質菌外の木材腐朽菌の出現頻度に注目し、分析を行った。

調査方法

① フィールド調査

2008年度より3月～11月の毎月1回、再度公園周辺のキノコを兵庫きのこ研究会と調査した。

② 標本作成

採取したキノコは凍結乾燥し、ウレタンポリマー樹脂でコーティングして標本化した。

③ 出現傾向の分析

2001～2013年度までの観察記録をエクセルに入力し、ピボットテーブル機能を用いて出現傾向を解析した。また、キノコの種類による出現頻度の分析を行った。

結果と考察

18年間の観察記録を3年ずつ加算した期間を区切りとし、それぞれの出現頻度上位100種類を菌根菌、木材腐朽菌（硬質菌、硬質菌外）、落葉分解菌、不明菌に分けて種数の変化を調べた（図1）。硬質菌外の木材腐朽菌は2003年までは13種しか確認できなかったが、2018年まででは23種確認された。これらのキノコは、上位種の中で最も種数の増加したキノコであった。

硬質菌外の増加の原因としては、ナラ枯れによるものが大きいと考えられる。近年はカシノナガキクイムシのマスアタックを受け、ナラ枯れをしている個体が再度公園でも多く確認された。調査の結果、兵庫県のナラガレ被害量と硬質菌外の木材腐朽菌の割合には関連があると考えられる（図2）。

ナラ枯れがおこると、カエントケが発生するという報告がある。六甲山ではこれまでカエントケは確認されていなかった。しかし、今年の10月18日の観察会でカエントケが確認された。今後はカエントケが六甲山に広がるのが予想される。また、このことによって、これまでのキノコの出現頻度に変化が生じるかもしれない。

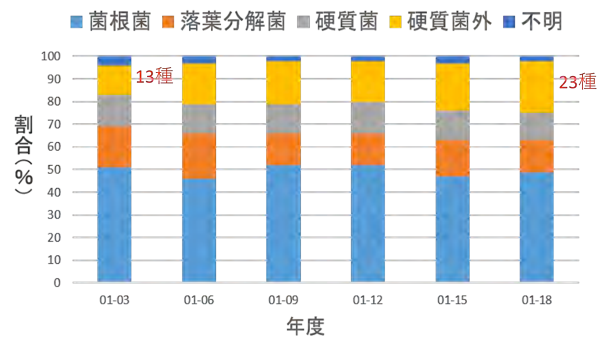


図1 上位100種における菌根菌と腐生菌の出現状況の変化

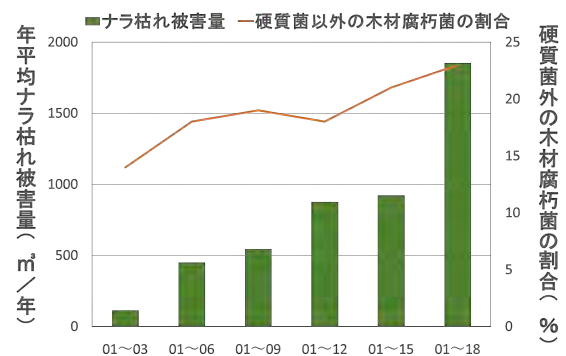


図2 ナラ枯れ被害量と硬質菌外の割合